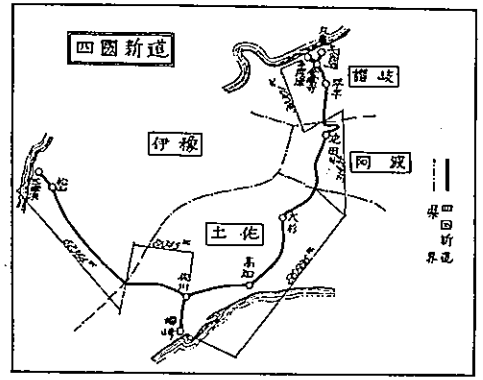
に提出し、県令と黒白を争った。参事院の判定は県令の独断専行を戒めるとともに、県会の建議書も却下している。

明治一六年（一八八三）の『愛媛県巡察復命書』は「本県令ノ事ヲ処スルヤ剛強敢為ニシテ、依違姑息ノ所為ナシト雖トモ、明敏ノ弊苛察ニ流ルルノ情況ナキヲ免カレサルカ如シ」と、剛強敢為、苛察、更には上下の情に融通を欠き、人望少なしと酷評し、他方、県会の動向についても、「議場ノ風タル巧ニ法規ヲ避ケ、嘲謔ノ言ヲ以テ得色アルカ如シ」と、県当局への反抗的態度を指摘している。



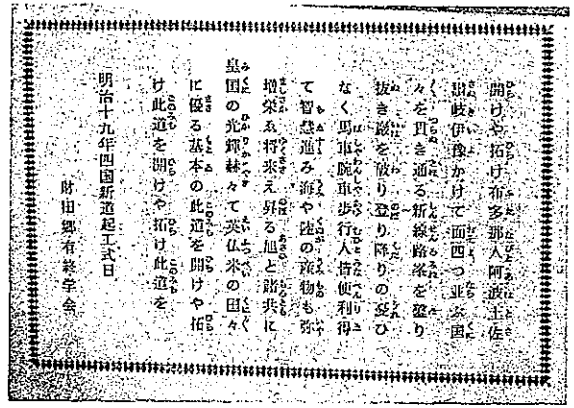
四国新道平面図

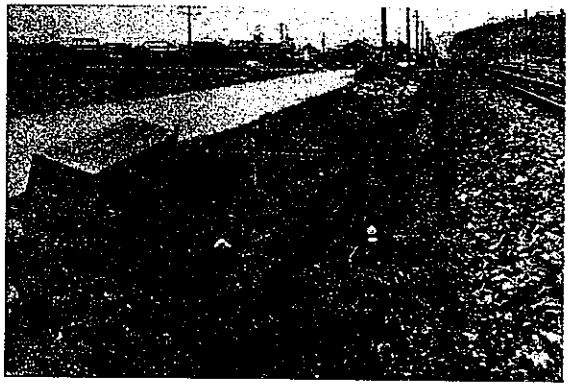
四国新道の開削

県政に対する県民感情が芳しくなかったなかで、県令関新平が在職中に力を注いだものに四国新道の開削工事がある。四国新道は丸亀より金蔵寺に至り、また多度津より金蔵寺、善通寺、琴平を経て、猪の鼻峠を越え、大歩危を通り高知に至り、更に高知より佐川、伊予国浮穴郡を経て松山、三津浜に至る全長二八〇・三㌔に及ぶ大V字型の四国幹線道路である。

この四国新道開削の計画は、初め大久保諶之丞の提唱によるが、四国全県の県令や県会議員を動かし、愛媛県会では五か年継続の費用を組んで、工事を開始した。愛媛県令関新平と高知県令田辺良顕が連署して内務卿山県有朋に「国道開鑿之義ニ付上申」書を提出したのは明

治一七年（一八八四）六月であり、次で徳島県令酒井明を加え三県令連署で新道開削の国庫補助金を要請したのが翌一八年（一八八五）六月、更に一九年（一八八六）三月の愛媛県会で五か年継続予算を組み、一九年（一八八六）四月七日、琴平に於て起工式を執行した。




上　明治19年四国新道起工式の歌
下　讃岐新道（善通寺市大麻町附近）

「路線開鑿申合書」によると、(一)道巾は三間以上で両側並木は一間ずつ。(二)橋梁は内法巾を二間以上とする。(三)猪の鼻越では高さ二〇間を切り下げ、込野名板橋まではカーブを施し、勾配を四寸とする、などのことが定められている。開削工事は大歩危小歩危の難所や岩盤掘削などの難問をかかえ、また予定以上の出費がかさんで、一時は中断することもあった。四国新道が完成したのは二七年（一八九四）四月である。この間、関新平は二〇年（一八八七）三月、知事在職のまま病没し、大久保諶之丞も二四年（一八九一）一二月、新道の完成を待たず、四二歳の若さで死去した。